医学部保健学科　全学講義

「人間として生きたい－ハンセン病元患者の声を聞く」

今回の全学講義は、講師にハンセン病元患者の谺雄二（こだまゆうじ）さんをお招きして、5月20日午後4時30分から90分にわたって行われた。谺さんは7歳で発病して以来、70歳の今日にいたるまで、人生のすべてをハンセン病療養所で過ごされた。現在も草津の国立療養所栗生楽泉園に入所しておられ、ハンセン病国家賠償訴訟全国原告団協議会・会長代理として、患者の人権回復のためにたたかっておられる。お話の内容は、ご自身の個人史とこの問題の社会史を巧妙に織り交ぜながら、わが国のハンセン病問題の悲劇を浮き彫りにするものだった。

会場はほぼ満席で、各学部の教官や学生が多数聴講した。特に広報はしなかったが学外からの聴講者も多く、反響も大きかった。新潟日報社説（5月25日付）では、「開かれた大学」の試みとして高い評価を受けた。山本正治医学部長が最後の挨拶の中で「私たちの普段の講義を何百万回繰り返しても得られない内容」と話されていた通り、聴講した学生は大きな感銘を受けたようで、「自分の無知を恥じる」、「衝撃を受けた」という感想が多く聞かれた。

企画した側の感想を若干述べさせていただくなら、今回の講義は「憐れみ」の視線を元患者の人たちに向けようというものではなく、谺さんのお話しを通して「医学や科学の＜知識＞とはそもそも何か」を聴講者に考えてほしかった。

細菌学のようなミクロの領域から疫学のようなマクロの領域まで、医学知識のほとんどは、病気についての＜事実＞を明らかにしようとするものである。しかし、医学には＜事実＞を知るだけではすまない複雑な知識領域がある。それは、データの解釈から医療政策の選択にいたる、人間の＜評価＞をめぐる問題群である。ハンセン病問題をあえて一言でいうなら、＜事実＞を前にした人間の＜評価＞の問題だった。かつてハンセン病の専門家とされる人々が、遺伝病と感染症とを混同した医療政策を進めるという＜評価＞上の誤謬をおかした。ハンセン病問題の悲劇とは、この＜評価＞上の誤謬が、戦後半世紀にわたって修正されることなく続いた点にある。この誤謬を正そうとした勇敢な医学者もあったが、当時の医学者はこの人物を正しく＜評価＞することさえなかった。

医療や科学技術の＜評価＞の問題は、かくも人間の生死や、生の尊厳に直結している。だからこそ、欧米諸国では、こういった知識についての「ELSI」つまり「倫理的・法的・社会的な側面」を複合的にとらえる文理融合的な種々の学問が発達してきた。筆者が専門にしている生命倫理学もこれに含まれるし、医療政策論といった分野も発達している。しかし日本では、残念ながらいまだこのような領域が学問として確立しているとはいえない。今回の試みが、ささやかながら本学ひいては日本での「ELSI」の発展に寄与することを願う。それによって、長谷川彰学長が最初の挨拶で述べられたように、「専門を深くきわめたばかりでなく、広い視野をもち、ものごとを総合的に判断する力を身につけた人材」が育つのではないか。そういう志を持つ若い人が、多数の聴講者の中から一人でも現れた時に、この企画は報われる。

（文責：医学部保健学科・宮坂道夫）

新潟大学五人の学生が、おぼれた少年を救助

―学長による学生褒賞―

平成14年7月7日（日）午後4時30分頃、五十嵐浜で遊泳中に溺れかけた少年二人を新潟大学の学生、サーフィン仲間の五人が救助。

その学生五人が、学長より褒賞され、大学名入りのメダルが贈られました。

工学部機能材料工学科　3年　大津　潤　（おおつ　じゅん）
工学部機能材料工学科　3年　佐々木貴之（ささき　たかゆき）
工学部機能材料工学科　3年　千野隆之　（ちの　たかゆき）
工学部機能材料工学科　3年　益田秀之　（ますだ　ひでゆき）
工学部機能材料工学科　3年　渡邊　隼　（わたなべ　はやと）

新潟日報－2002年（平成14年）7月9日（火曜日）－に掲載。新潟西署と新潟西消防署は五人の行動を「勇敢だった」とコメント。